
最後の夏 最初の冬

S . S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の夏 最初の冬

【NZコード】

NZ8295C

【作者名】

S・S

【あらすじ】

このお話は甲子園を目指して一生懸命戦つていくある高校の投手とその幼馴染のラブストーリーです。一人の回想という形で話が展開していきます。

「透一^{ヒカル}なにボーッとしてんの?」

俺^{おれ}は智美^{ヒモミ}の声ではつと我に返つた。

周りを見ると落ち着いた感じの絵画やちよつと上品な喫茶店の店内の様子が目に入った。

テーブルの上のコーヒーからは湯氣^{きつ}が立ち上り、田の前には俺の幼馴染^{なじみ}の川瀬智美^{かわせ ヒモミ}の姿があつた。

すこしが伸びした感じのちょっと大人っぽい服装で、懸命にコーヒーを飲もうとしているが無理のようだ。かなり苦そうな顔をしている。

「智美、飲めないならコーヒー頼むなよ。他にもいろいろあつたら?」

「だつてこいつって普通一緒にもの頼むでしょ? 透がコーヒー頼んだから…」

誰がそんなこと決めたんだよ、まったく。俺は店員さんを呼んで智美にカフェオレを頼んだ。

「そんなに無理しなくていいじゃん。コーヒーみたいな苦いもん苦手だろ」

俺は肩をすくめて言った。でも別に悪い気はしない。

ちょっと窓から外を眺めてみた。

少し曇つていて、風もあるようだ。街路樹がすこし揺れている。

「雪降らないね…、今年もホワイトクリスマスは無理なのかな。こうこう田へりい降ってくれてもいいのにね」

少し残念そうな顔で言つ。

確かにホワイトクリスマスつてのはよく恋愛ものならよく出でてくるし、いいムードができると思つ。

が、ここは冬の寒さは結構厳しいが雪が降ることはほとんどない。智美に相槌を打つて一人で窓から空を見上げた。

その後、少し温かいものを飲みながら話をして、俺達は喫茶店を後にした。

「どう行く？ ちょっと遠いけど駅前のクリスマス・ツリーでも見に行こうか？」

俺が尋ねると智美は予想外のところへ行きたいといった。

「松木神社に行かない？ ほら、私が四ヶ月前に透に告白した場所。確か決勝の次の日だったよね？」

そういえばそうだったな…。

もうあれから四ヶ月になるんだった。
もとをたどればもつ六ヶ月も前の話だ。

「……続いて天気予報です。広島は西の風がやや強く、曇りのち雨、

県は南西の……

「」の時期の天気予報は毎日「」んな感じだ。

毎日毎日雨ばつか。

いやになつてくる。

なんで梅雨なんかあるのかと思つがこればかりはどひょひょもない。

「透、そろそろ行く時間よ。はやく行かな」と朝練遅れるわよ！」

母さんの声が飛ぶ。

そうだ、こんなとこで迷惑をとしている時間はない。

俺はさうひと荷物をバッグに放り込んで家を出た。

田んぼの真ん中の道をチャリで飛ばす。
まだまだ背の低い稻が並ぶ水田の中からはカエルの雨を待つ様な鳴き声が聞こえてくる。

空模様は曇つていていまにも降り出しそうな感じだ。
せめて朝練の間ぐらいはもつてほしい。

十分ぐらいで学校には着いた。

まっすぐ部室に向かいバッグからグローブを取り出しグランドへ走る。

グランドに入るとみんな整列していた。

「おい沢口遅いぞ。^{さわぐち}五分前厳守と言つたらひつ

辻監督が少しむつとした声で言つた。

「すいません」

監督に頭を下げて列に加わる。

練習着で来て良かつたと思つた。

「気をつけー礼！」

「お願いしますー！」

「うして俺の一日は始まる。

ここ数ヶ月はずつとこの調子だ。

それはもちろんいまから一週間後にはじまる全国高等学校野球選手権大会、いわゆる夏の甲子園の広島県予選に向けてだ。
もともと俺たち松川高校は県内ではたいしたレベルにはいなかつた。が、去年はベスト8に残り、今年は去年よりもいいチームができるといふと俺は思つ。

優勝だつて俺たちならできる、みんなそう思つてゐる。

だから朝早くからノックを受け土と汗にまみれ、昼のわずかな時間にもバットを振り、夜はボールが見えなくなるまで練習をしているのだ。

「透ーお疲れ！今日も雨だつたから体育館だつたの？」

放課後、練習を終え帰ろうとしていたら玄関で智美に会つた。
川瀬智美、さつきも言つたが、俺の幼馴染だ。
いつも笑顔で周囲を明るくし、普通にかわいい。
小学校のときからずっと学年で一番モテてる。
今までかなりの人数に告られてるがOKを出したことはない。

「ああ。」一週間はずつとこの調子

靴紐を結びながら答えた。

「ねえ、帰り一人でしょ。一緒に帰らない？」

玄関の外を見ながら智美が言った。

そういうえば中学の頃はよく一緒に帰っていたが高校入ってからあまりない。

帰る時間が違うせいもあるが、お互い相手を意識しだしたからだと思う。

少なくとも俺はそうだ。

自分が智美に惚れてると気づいたのは高校に入つてからだった。

「ん。別にいいよ」

俺は内心ちょっと緊張しながらも表に出さないように素つ氣なく答えた。

そして俺たちは揃つて玄関を出た。

他愛のない話をしているうちに帰り道が分かれるところまで来た。じゃあな、と俺はそれだけ言って智美に背を向けた。

しかし智美からの返事はない。

俺はどうしたのかと思つて振り返ると智美はいつになく真剣な表情でこっちを見ていた。

「どうかしたか？」

不思議に思つて聞いてみた。

智美は何か言おうとしたがやめて、

「ううん、なんでもない。じゃあ、またね」

そう言つて走つて帰つていった。

そして一週間後、県予選が始まった。

俺らはノーシードだから一回戦から決勝まで七試合戦わなくてはならない。

一回戦の相手は北川。

俺が先発して五回を無失点。

打線は相手の投手をとらえて十七安打十一点の猛攻。
五回コールドで初戦を飾った。

二日後の二回戦は蒲刈西。

今回は三番ライトで先発は一年生の島田。

六回まで安定したピッチングで散発四安打に抑える好投。

打線はしつかり援護。

六回裏までに七点取り、七回表は三年の館山たてやまがきつちり抑えて七回コールド。

ここまでは余裕だった。

ところが次の三回戦であたつたのは昨年の準優勝校、三原工業だった。

今年もその力は半端でなく、二回戦ではこれまた強豪の明陵を粉砕していた。

特徴はとにかく強力なその打線。

一番から九番まで全員がホームランを打てるといわれていた。
辻監督はチーム全員に気持ちで負けるな、やれることをやれと檄げきを飛ばし、俺たちをグランドへと送り出した。

俺は一回から五回は何とか持ちこたえた。

ところが六回に始めてノーアウトでランナーを背負つてしまつと、焦りから次の打者にフォアボールを「え無死」、一塁のピンチを作

つてしまつた。

次の打者は四番大原だつた。

体格のいい、いかにも打つたら飛びますつて感じのバッターだ。

そして初球を打たれた。

するどいライナーがセカンド松村の頭を飛び越し、右中間を破られランナー一人が生還し、先制を許してしまつた。

その後はショート富原の好守にも救われなんとか抑えたが、一点は痛かつた。

しかし、その裏の攻撃でこちらも四番村山のツーランホームランで追いついた。

これに勇気づけられ俺も七、八、九回を無失点で終え九回の裏、九番菊池のタイムリーヒットでサヨナラ勝ちを納めた。

この試合で勢いを得たのか、四回戦では昨年敗れた栄徳にも七対二で勝ち、準々決勝でも富島商業に五対三で勝つて松川ははじめてベスト4まで進出した。

準決勝の前には一日の休養日が認められているのでそのまま学校で入念にプレーをチェックした。

俺は連投で疲れている肩を休ませるため投げ込みはせず、軽いノックとフリー・バッティングだけとなつた。

みんなは明日のことを考え自分やチームの調子をどう上げていくかをしつかり考へてゐるよつだつた。

そして次の日、準決勝の第一試合で山陽北高校と対決した。

俺は死球でランナー一人を出した以外は完全に抑えたが、うちの打球も相手投手に翻弄され六回までパーエフェクトに抑えられていた。しかし、七回の表に試合は動いた。

まさにラッキー7だつた。一番峰が振り逃げで塁に出ると二番松村が送りバント。

これを相手が処理に手間取り内野安打になつた。

そして俺に打順が回つてきた。

俺はネクストバッターズサークルからゆっくり打席に向かつた。ちらと一塁側のスタンドを見ると智美が最前列で心配そうな顔で見ている。

俺は智美の方に顔を向け大丈夫だと軽く頷いてバッター・ポックスに入つた。

下手に内野ゴロを打つてこのチャンスを潰すようなことは出来ない。監督は俺にバントをさせるだらうと思ったが出されたサインは「打て」だつた。

俺は了解のサインを送り、バットを構えた。

相手の投手は今までランナーを背負つてなかつたから少し焦つているようだつた。

投げる間隔が短くなつている。

初球ボール、二球目ストライク、三球目ボール。

そして俺は四球目の外角低めのスライダーを打つた。

ボールは真っ直ぐにショートの頭を越え左中間へ飛んで行き、ランナー一人が生還するタイムリー・ツーベースヒットとなつた。二塁に着くと自然にガツツポーズが出た。

ベンチもスタンドも大騒ぎになつた。

結局これが決勝点となり、二対〇で俺たちが勝つた。

その日の晩、部屋でベッドに転がつて明日のことを考えていると急に玄関のチャイムが鳴つた。

しばらくして母さんが俺を呼んだ。

何事かと思って一階から降りてみるとそこには智美がいた。

「『めんね、こんな時間に。ちょっといい?』

いつもと違い、すこしく不安そうな顔で言った。

俺は何かあったのかと思い、とりあえず外に出て近くの公園まで行つた。

俺はそこで聞いてみた。

「なんで今日またやった？ 何があった？」

智美はブランコに腰掛け、いつものしばら黙つていた。
そしてこう言った。

「……、明日のことがすぐ不安になつて…。ほんとは透のほうが不安なはずなのにね。今日勝つたときはすぐうれしかつた。ヒット打つたときの透はすぐかっこよかつたよ。でもね、試合が終わつた後、明日決勝なんだって思つと何か怖くなつちゃつて……。ごめんね、こんな時間にこんなことで呼び出して…」

俺はどう言つていいいのか分からなかつた。

ドリマとかならこういつ時に相手を安心させるよくなつこいい言葉を言うのだろうけど、今の智美的状況だと下手なこと言つたら泣き出しそうな感じだ。

しばらく考えたがいい言葉は思いつかなかつた。

「大丈夫だつて。俺が打たれなければいいだけ。そうすればみんなが援護してくれる。だから智美も明日しっかり応援してくれよ」

もう少しいい言葉はなかつたのかと自分でも思つがこれでも精一杯の言葉だ。

智美は少しは落ち着いてくれたみたいだつた。

「うん。透なら大丈夫よね。じゃあ私を絶対に甲子園に連れて行ってくれる?」

「ああ。任せろ」

俺がそう言つと智美は笑顔になつて、

「約束よ!…じゃあ明日試合頑張つてね」

そう言つて智美は帰つていった。

そして次の日、とうとう決勝の日がやつてきた。

相手はここ数年ずっと甲子園に出ている広商学園だ。

強豪中の強豪、全国でもトップの過去六回の全国制覇を誇る超強豪校だ。

今年もその力は健在。まだ予選で一点も取られていらないエース上村、強力な破壊力を持つ打撃陣。

昨日の第二試合では清水館を十一対〇と完全にノックアウトした。三回戦であたつた三原工業よりも一回りも二回りも大きな壁、これを乗り越えて初めて俺達は甲子園に行ける。チーム全員が死ぬ気でぶつかつた。

先発メンバーは一番センター峰、二番セカンド松村、三番ピッチャーライ、四番キャッチャー村山、五番サード今村、六番ファースト堀田、七番レフト天本、八番ショート富原、九番ライト菊池。
全員二年生。

甲子園を目標に三年間一緒に汗を流してきた。
これが最後の夏、悔いのない戦いをしようとレギュラーもベンチも出せる力をすべて出した。

序盤は驚くほど松川有利に進んだ。

三回裏、連打で一死一、三塁とすると六番広永のタイムリー・ベースヒットで一点先制。

さらに五回裏にも五番今村のソロホームランで一点を追加し、一点差をつけた。

相手の攻撃も六回まで散発三安打。

このまま行くかと思われたが七回表、昨日のラッキー7は魔の七回に変わった。

先頭バッターの三番佐藤にホームランを浴び、一点差に詰め寄られると四球とヒット一本で無死満塁。

やつとの思いでアウトを一つとり、アウト後一つでチエンジとなつて気が緩んだ。

そこを突かれた。

相手のラストバッター瀬野にレフト前ヒットを許し一気にランナー二人が帰り逆転されてしまった。

その次の回はあっけなく三者凡退に打ち取られそのまま九回の裏を迎ってしまった。

しかし点差はまだ一点。ワンチャンスで取れる得点だ。

まだまだいけるとチーム全員が信じていた。

そして先頭打者の八番宮原に代わってバッターボックスに立つた大竹がヒットで塁に出て、谷山が代走。

続く九番菊池がバントで送り一死一塁。

そして一番峰のセンター前ヒットで一死一、三塁の大チャンスとなつた。さらに盗塁で一、二塁となつた。

この大チャンスにベンチもスタンドも沸いた。

ワンヒットでサヨナラ、よし俺達はまだ神様に見捨てられてない、甲子園に行ける、そう思った。

しかし一番松村は三振に倒れる。

そして俺の打順となつた。

もちろんこの状況でサインなどない。

監督を一応見たが頷いただけ。

こつちも頷き返して打席に入った。

打席に入るともう何も考えなかつた。

無心で相手ピッチャーが投げてくるボールのみに集中した。
ボール、ストライク、ストライク、ボール、ファール、ファール、
ボール。

カウントはツースリーになつた。

そして次の球を振つた

。

快音が響くことはなかつた。

ボールはまっすぐキャッチャーのグローブに収まつた。

俺は呆然とバッターボックスに立ち尽くし相手チームが抱き合い喜びを爆発させてているのを見ていた。

次の日、俺は何もする気が起きなかつた。

俺があそこで打つていれば、俺があそこで打たれなければ……、俺達は甲子園に行けたんだ。俺はみんなの夢を奪つてしまつた。智美との約束も……。

その時、玄関のチャイムがなつた。

誰だろうと思つて出てみると智美だつた。

ちよつといいかな?と俺を連れ出し、近くの神社まで連れて行つた。

どうして俺をこんな所へ連れてきたのだ？ 、そう思つて聞く。「うう」としたら先に智美が喋つた。

「予選が始まる前日には、ここに来てお願い事を一つしたの。やっぱり、二つは欲張りだつたからいけなかつたのかな。もちろん一つは松川の優勝、けどダメだつた。でももう一つはまだね、結果が出てないの。何だと思つ？」

俺はしばらく考えたが全然検討がつかず、さあな、と返した。すると智美は少し頬を紅潮させて言った。

「透がね、私のことを好きでありますよ」とつて

思い出話をしているうちに俺達は神社に着いた。
一緒に石段を登つて行つて境内に入る。

「ねえ、せっかく神社まで来たんだし何かお願ひことしない？」

智美がそう言つたから俺はそうだな、と応じて賽銭箱に百円入れてこう願つた。

智美が俺をずっと好きでありますよ、傍にいてくれますよ」と、
しばりくして智美が急にこいつを向いて言つた。

「透、キスしていい？」

突然のことには俺は焦つた。

俺はキスなんてもちろんしたことはない。
多分俺の顔は今真っ赤だ。

そして困っている俺に智美が返答を待たずにキスをした。

空からは白い雪が舞い降りてきた。

完

(後書き)

「こんにちはー今回私は始めて投稿しました。まだまだ小説を書いたりするのに慣れていない未熟者ですが一生懸命書いていきたいと思っています。皆さんからの指摘や意見を次につなげていきたいと思っているので是非読んだら感想や評価をお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295c/>

最後の夏 最初の冬

2010年10月20日18時47分発行